

令和 2 年 6 月 25 日現在

機関番号：14602

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13387

研究課題名(和文)『玄峰集』を中心とした蕉風俳諧受容に関する研究

研究課題名(英文) Study on the acceptance of Basho style haiku focusing on "Genposhu."

研究代表者

服部 温子 (HATTORI, Atsuko)

奈良女子大学・大学院人間文化研究科・博士研究員

研究者番号：60790194

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、蕉門の高弟として知られる嵐雪の発句集『玄峰集』を軸として、嵐雪および蕉風俳諧の受容について考察することにある。嵐雪は、近世期に芭蕉・其角について高い評価を受けた俳人である。その嵐雪の発句集として寛延3年(1750)に出版された『玄峰集』は、明治初年まで100年以上にわたり版を重ねた。なぜ嵐雪および『玄峰集』は、これほど当時の人々の支持を集めたのか。それを考える土台として、本研究では『玄峰集』の成立の背景、諸本の関係、後世への影響について考察することで、嵐雪および蕉風俳諧受容の一端について明らかにすることを旨とした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近世中期以降の嵐雪に対する評価は、芭蕉や其角に劣らないものがある。しかしながら、俳諧研究においては未だに「蕉風俳諧＝芭蕉の俳諧」、「江戸の俳諧＝其角の俳諧」と捉えられている。近世期の人々の受容のあり方から嵐雪および蕉風俳諧について明らかにできれば、従来の研究における「蕉風俳諧＝芭蕉の俳諧」、「江戸の俳諧＝其角の俳諧」といった偏った見方を排除し、近世期の人々にとっての「蕉風俳諧」あるいは「江戸俳諧」という見方を取り戻す一助となるはずである。それは俳諧研究および日本文学研究にとって大きな意味をもつものとなる可能性がある。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to consider the acceptance of Ransetsu and the Basho style of haiku by focusing on "Genposhu." Ransetsu is known as one of the Basho's best pupil. He is a poet who was highly evaluated after Basho and Kikaku in the early modern period. "Genposhu" is Ransetsu haiku collection works and published in 1750. It was republished over 100 years until the first years of the Meiji era. Why did Ransetsu and "Genposhu" so popular among the people at that time? As the premise for thinking about it, I have tried to make clear a part of acceptance of Ransetsu and the Basho style of haiku by focusing "Genposhu." More specifically, I have examined the background of the formation of "Genposhu," and the history of republishing, and its influence on posterity.

研究分野：日本文学

キーワード：蕉風俳諧 元禄俳諧 嵐雪 玄峰集

## 1. 研究開始当初の背景

芭蕉とその門人たちが作り上げた蕉風俳諧は、時代を経るほどに「正風」として地位を高め、後世に大きな影響を及ぼした。特に芭蕉 50 回忌にあたる寛保 3 年 (1743) の頃からは、蕉風俳諧を見直すことで停滞した俳壇の状況を打開することを目指す「蕉風復興運動」の流れに乗り、芭蕉発句集『芭蕉句選』(華雀編、元文 4 年=1739)、其角発句集『五元集』(旨原編、延享 4 年=1747) など芭蕉および蕉門俳人に関する俳書が盛んに編集・出版されるようになった。本研究が対象とする嵐雪発句集『玄峰集』(改題本『嵐雪句集』)もその流れで出版されたものである。

嵐雪は、其角と同じく江戸で宗匠として活躍したが、生涯に発句は 500 句ほど、撰集はわずかに 4 冊しか残していない。其角はもちろん、野坡や支考といった他の蕉門宗匠たちと比較しても、その活動内容は見劣りする。それにも関わらず、嵐雪は、蕉風復興が叫ばれた近世中期以降、芭蕉・其角について高い評価を受けている。例えば、蕪村の師である巴人は『梅鏡』(元文 4 年=1739)序文において芭蕉・其角・嵐雪を俳諧における三つの鏡(=模範)と述べており、『都名所図会』等で有名な秋里籬島は、初心者向けの俳諧作法書『俳翼』(寛政 7 年=1795)を著した際、手本とすべき俳人として芭蕉・其角とともに嵐雪をあげている。同時代の他の蕉門俳人に比して、とりわけ目立った活動を見せたわけではない嵐雪がなぜ後世にこれほど高い評価を受けているのか。後世の人々が模範とした嵐雪の俳諧とは何なのか。このような問題意識のもと、研究代表者はこれまでも嵐雪に関する研究を進めてきた。

嵐雪への高い評価は、嵐雪関係の俳書の出版状況からも窺える。例えば、嵐雪の代表的撰集で元禄 3 年 (1690) に出版された『其袋』は、近世末期まで何度も再印出版されている。同様に『玄峰集』についても、竹川藤兵衛版、西村源六版、河内屋太助版、英文蔵版、浅倉久兵衛版など多くのバージョンが存在し、明治初年まで版を重ねていることがわかっている。それだけでなく『玄峰集』をもととして注釈書『嵐雪発句撮解』(荳丹著、文化 3 年=1803)や掌中本『掌中嵐雪発句集』(编者不明、天保年間)も編集・出版されており、嵐雪に高い需要があったことが知られる。

なぜ嵐雪および『玄峰集』はこれほど当時の人々の支持を集めたのか。俳諧史のなかで嵐雪および『玄峰集』とはどのような存在なのか。その問題について考える土台として、『玄峰集』成立の背景、諸本の関係、後世への影響について調査することで、嵐雪および蕉風俳諧受容の一端を明らかにしたいと考え、本研究を思い立った。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、蕉門の高弟として知られる嵐雪の発句集『玄峰集』を軸として嵐雪および蕉風俳諧の受容について考察することにある。嵐雪は、近世中期以降の芭蕉・其角について高い評価を受けた俳人である。その嵐雪の発句集として寛延 3 年 (1750) に出版された『玄峰集』は、明治初年まで 100 年以上にわたり版を重ねた。なぜ嵐雪および『玄峰集』はこれほど当時の人々の支持を集めたのか。それを考える土台として、本研究では『玄峰集』の成立の背景、『玄峰集』諸本の関係、『玄峰集』の後世への影響について考察することで、嵐雪および蕉風俳諧受容の一端を明らかにすることを目指した。

俳諧研究においては未だに「蕉風俳諧 = 芭蕉の俳諧」、「江戸の俳諧 = 其角の俳諧」と捉えられている感がある。しかし、先述したように、近世中期以降の嵐雪に対する評価は、芭蕉や其角に劣らないものがある。そのことは『玄峰集』が 100 年以上にわたり版を重ねていることから明らかである。本研究によって、蕉風俳諧受容の実態を明らかにすることができれば、従来の研究における「蕉風俳諧 = 芭蕉の俳諧」、「江戸の俳諧 = 其角の俳諧」といった偏った見方を排除し、近世期の人々にとっての「蕉風俳諧」あるいは「江戸俳諧」を明らかにできるはずである。

## 3. 研究の方法

本研究では、『玄峰集』について、大きく以下の 3 点の考察を行うことで、嵐雪および蕉風俳諧受容の一端を明らかにすることを試みている。

### 『玄峰集』成立の背景

『玄峰集』は江戸の俳人旨原の編集で寛延 3 年 (1750) に 2 冊本で出版された。旨原は、この 3 年前の延享 4 年 (1747) に既に其角発句集『五元集』4 冊を出版しており、『玄峰集』はその姉妹本と言える。ただし、両書の成立の仕方は異なる。『五元集』4 冊のうち 3 冊は其角が生前に残した草稿をもとにしている。それに対し、『玄峰集』は编者旨原が各俳書から嵐雪発句を拾い集め、類題別に並べている。研究代表者はこれまでに各俳書に散見する嵐雪発句の資料を収集してきたが、それらと『玄峰集』の本文を比較すると、『玄峰集』では前書を改変している発句や配列する季節を変えている発句(冬の句であると付記しながら春の句に配列しているなど)がある。そこで、研究代表者がこれまでに収集してきた嵐雪発句の資料と『玄峰集』の本文を比較検討することで、『玄峰集』における旨原の編集態度を明らかにすることを試みた。

#### 『玄峰集』諸本の関係

『玄峰集』は、寛延3年(1750)に竹川藤兵衛から出版された後、西村源六、浅倉屋久兵衛など版元を変えながら明治初年まで再印(あるいは再板)出版され続けた。『玄峰集』は、改題本『嵐雪句集』も含め、現在所在が確認できるものに限っても33施設に54点伝わる。しかし、これらの伝本については、初版が江戸の竹川藤兵衛版であること、最終版が東京の浅倉屋久兵衛版であることだけははっきりしているものの、その間にはどのように板元および版面が変化していったか、再印(再板)出版された時期はいつかなどは明らかにされてこなかった。そこで、『玄峰集』54点について詳細な書誌調査を行い、諸本の関係を明らかにすることを試みた。

#### 『玄峰集』の後世への影響

『玄峰集』は100年以上版を重ねたベストセラーとして大きな意味を持つが、注釈書『嵐雪発句撮解』(莊丹編、文化3年=1803)、掌中本『掌中嵐雪発句集』(編者不明、天保年間)のような後に出版される俳書のもとになっている点でも注目に値する。両書は句形・前書の一致から『玄峰集』からの抜粋によって作られていることがわかる。ただし、その配列や季節の扱いなど、『玄峰集』と異なる箇所もある。そこで、この『嵐雪発句撮解』・『掌中嵐雪発句集』といった後世に出版された嵐雪発句を取り扱った俳書と『玄峰集』を比較検討し、『玄峰集』が後世の嵐雪受容にどのような影響を与えているか明らかにすることを試みた。

## 4. 研究成果

#### 『玄峰集』成立の背景

先述のとおり、『玄峰集』の編者である旨原は、『玄峰集』刊行の3年前に其角発句集『五元集』4冊を出版しているが、両書の成立の仕方は異なる。『五元集』4冊のうち3冊は其角が生前に残した草稿をもとにしているのに対し、『玄峰集』は編者旨原が各俳書から嵐雪発句を拾い集め、類題別に並べている。『玄峰集』の本文を確認すると、各俳書に散見する嵐雪発句の句形・前書・配列と『玄峰集』が採用するそれとの間には少なからず異同があることがわかる。そこで、各俳書が採用する嵐雪発句の句形・前書・配列と『玄峰集』が採用するそれを比較検討し、旨原の『玄峰集』編集態度を考察した。

嵐雪発句が入集する俳書には、嵐雪もしくは嵐雪門人が編集に関わったもの、蕉門以外の他派が編集したもの、嵐雪生前に出版されているもの、死後に出版されているものなど色々ある。一般的には、編集にあたって最も重視されるのは、嵐雪もしくは嵐雪門人が編集した俳書に入集する句形と考えられる。しかしながら、本調査の結果では、旨原は必ずしも嵐雪が直接編集に関わった俳書の句形を採用しているとは限らないことが明らかになった。一例をあげると、ある発句の上五文字は、元禄7年(1694)に嵐雪が編んだ『或時集』では「畑打に」、野坡らが編んで同年に刊行された『炭俵』では「早乙女に」となっており大きく異なるが、旨原が採用したのは「早乙女に」の方であった。『玄峰集』には『或時集』にしか入集しない発句もあるので、旨原が『或時集』にあたれなかったというわけではない。また、やはり『或時集』『炭俵』ともに入集するという別の発句では、『或時集』の句形を採用しているため、『或時集』を軽視していたというわけでもない。こうした事例から旨原は一句ごとにどの句形を採用すべきか吟味した上で『玄峰集』を編んでいたと考えられるのである。そうだとすると、『玄峰集』刊行以前の俳書がいずれも冬の句として扱っている「梅一輪」発句を『玄峰集』では春の句としたことも旨原の吟味の末であったことになる。

嵐雪の代表句として知られる「梅一輪」句は、嵐雪生前の宝永2年(1705)に出版された『庭の巻』(立詠編)にも、宝永5年(1708)に嵐雪の高弟百里が編んだ嵐雪一周忌追善集『とをのく』にも「寒梅」の前書が付され入集する。このことから嵐雪自身が寒梅の句として詠んだことは明らかである。それにもかかわらず、『玄峰集』が春の句として採用したことによって、後に出版される多くの名句集や注釈書においても春の句として扱われ鑑賞されてきてしまった。

以上のような調査結果から、『玄峰集』の刊行は、嵐雪発句の鑑賞を容易にしたという点で嵐雪および蕉風俳諧受容に大きく貢献したが、一方では旨原が提示する一つの句形・前書・季節(つまりは一つの解釈)に定められてしまったことでそれぞれの発句が本来持っていたはずの、異なる解釈の可能性を排除してしまったとも言えるのである。

『玄峰集』の本文分析を通して、ここまでは明らかにできたが、そうした『玄峰集』における判断の背景にあった編者旨原の俳諧観については、期間内には十分に明らかにすることはできなかった。そこで当初の計画にはなかったのだが、令和元年度から旨原の作品を集めた『風月集』に入集する旨原俳文の分析を通し旨原の俳諧観についても考察している。それらを明らかにした上で、『玄峰集』成立の背景についてまとめ、近く公表する予定である。

#### 『玄峰集』諸本の関係

先述のとおり、『玄峰集』は、寛延3年(1750)の出版以降100年以上にわたり版を重ねている。そのため現在文庫・図書館に所在が確認できるものだけでも50点以上存在しているが、それらについての版面の異同、書肆の変遷等については、これまで全く調査されてこなかった。そ

ここで、これら『玄峰集』諸本について、直接訪問できる場所は原本にあたり、遠方については複写を取り寄せ、諸本の関係を調査・考察した。

その結果、『玄峰集』の蔵板元は江戸の竹川藤兵衛からはじまり、明和頃に江戸の西村源六に、寛政6年(1794)に大坂の河内屋太助に、化政期に江戸の英文蔵に、明治に入ってから東京の浅倉屋久兵衛に移り変わっていることを明らかにした。

板面を確認したところ、初板の竹川版から明治の浅倉版に至るまで同板であり、本文改訂も行われていないことがわかった。河内屋版の最初期のものは「寛政六年甲寅夏開板」という刊記を有するが、実際には板権が移っただけで再板はしていないということである。

本文板面が一貫して変化していない一方で、その書名は、蔵板元が変わるたび頻繁に変えられていることが明らかになった。まず、竹川から西村に板権が移った当初は竹川版と同じ題簽が用いられているが、西村版の途中から『嵐雪句集』と書名が改められている。おそらくこの書名の方が、内容がわかりやすくより多くの読者を獲得できると考えての改題であろう。しかし、河内に板権が移ると、再び『玄峯集』に改められている。これについては、寛保3年(1743)の芭蕉五十回忌から寛政5年(1793)の百回忌までの間に、多くの蕉門俳書が刊行されたことにより、「嵐雪=玄峰集」という認知が広まり、原書名の価値が高まったことによるものと考えられる。しかしながら、英版以降は再び新たな題簽が作られ『嵐雪句集』に戻されている。俳諧の享受人口が前時代よりもさらに広がったことから、初心者にもわかりやすい書名が求められたためかと考えられる。この頃になると、複数人の発句集をまとめた『俳諧四季艸』のような俳諧叢書も出版されており、『玄峰集』はその底本にも使われていたため、それらの叢書の読者にもわかりやすい『嵐雪句集』の方が本屋にとって都合がよかったとも考えられる。

以上のような書肆(板権)の変遷や変更点がわかったものの、解決を見なかった本が、唯一『嵐雪発句集』という外題(刷題簽)を持つ柿衛文庫所蔵本である。板面の状態から浅倉版より後に刷られたものと考えられるが、柿衛文庫所蔵本成立の経緯については未だ明らかにできていない。柿衛文庫本成立の経緯をはっきりさせた上で、以上に述べた諸本の関係についての調査結果を近く公表する予定である。

#### 『玄峰集』の後世への影響

先述のとおり、『玄峰集』は後世に出版された嵐雪関係俳書のもとになっている点でも注目価値する。『玄峰集』が後世の嵐雪受容にどのような影響を与えているか検討するため、後世に出版された嵐雪発句を取り扱った俳書における句形・前書・配列と『玄峰集』のそれを比較検討した。当初の計画にあった『嵐雪発句撮解』『掌中嵐雪発句集』に加え、当時広く流布した『俳諧古選』(嘯山編、宝暦13年刊)と『一翁四哲集』(西馬編、安政3年刊)についても調査した。以下、年代順に4点の調査結果を示す。

##### (1)『俳諧古選』(宝暦13年=1763)

『俳諧古選』(以下『古選』)は、漢詩人としても有名な三宅嘯山が、守武・宗鑑以来の俳人諸家の発句を集め類題別に編集したものである。『古選』では26句の嵐雪発句を収録しているが、いずれも『玄峰集』に収録される句であり、『玄峰集』を参照していることは明らかである。しかしながら、『玄峰集』では季の句として入集させているものでも、初出俳書において雑の句になっているものについては雑の句として入集させており、『玄峰集』は一資料として参照しているにすぎないことを明らかにした。

##### (2)『嵐雪発句撮解』(文化3年刊=1806)

『嵐雪発句撮解』(以下『撮解』)は、嵐雪の系譜につらなる俳人莊丹が著した注釈書で、嵐雪発句の注釈書としては最初のものである。『撮解』では『玄峰集』全423句中から108句取り上げ注釈を施している。『撮解』は、『玄峰集』が定めた句形・前書・季節をそのまま採用している。しかしながら、『玄峰集』が夏の句としている「鶯の音を入あやし二つほし」に対し、注釈中で秋の句であると季の誤りを指摘するなど、盲目的に『玄峰集』に従っているわけではない。また、初出の俳書についての言及も的確である。こうした点から『撮解』は、広く文献調査をした上で著されていることを明らかにした。

##### (3)『掌中嵐雪発句集』(天保年間=1830~40年代)

『掌中嵐雪発句集』(以下『掌中』)は、編者・出版年ともにわかっていないが、広く流布したらしく現在でも伝本が多く、後には、芭蕉・其角・蓼太・麦林など複数人の掌中句集とあわせて叢書『俳諧四季艸』としても出版されている。『掌中』は、『玄峰集』の全句を上下二冊に振り分けているが、句形を誤っているものが2句、前書を誤っているものが3句、重複して収録されたものが2句、収録漏れが3句あり、その編集はかなり杜撰なものであったことがうかがえる。また、『玄峰集』では、立志の「我恋よ目も鼻もなき花の色」、沾徳の「あしの穂やおやちと呼ぶは渡し守」の二句が誤って嵐雪発句として入集しているが、『掌中』ではその2句についても誤伝と気づかず収録している。こうした誤りは、編集の杜撰さ故か、この頃になると古い俳書が失われ、初出の俳書が確認できなくなっていたためか、編者が不明なため現時点では判断がつかない。今後、嵐雪以外の掌中発句集についても調査した上で結論を出したい。

##### (4)『一翁四哲集』(安政3年=1856)

『一翁四哲集』(以下『四哲』)は、芭蕉・其角・嵐雪・去来・丈草の発句を類題別に並べたもので、俳諧七部集の注釈書『標注七部集』なども手がけ、蕉風俳諧の普及に熱心に取り組んだ西馬が手がけている。嵐雪発句については前書・句形などから、『玄峰集』を資料としていること

は明らかである。『四哲』は、頭注で異本に見える別句形を示すなどしており、広く調査した上で編集していることがうかがえる。しかしながら、収録句数が多いためか、いくつかの発句と作者名に誤植が見られる。また、『四哲』でも、『玄峰集』において誤って入手させている立志発句「我恋よ目も鼻もなき花の色」を嵐雪発句として入集させている。これについても、編集の杜撰さ故か、古い俳書が確認できなくなっていたためか、現時点では判断がつかない。今後、西馬が手がけた他の俳書にもあたり、西馬の調査がどの程度の精度であったか調べた上で結論を出したい。

さらに、当初の予定にはなかったが、調査の過程で触れた嵐雪発句の古注釈のうち、嵐雪受容のあり方を考えるうえで重要だと考えるものについての検討も行った。これについては、「嵐雪発句「名月を家隆にゆるす朧かな」と題する論文に発表している。

嵐雪発句「名月を家隆にゆるす朧かな」は、『きさらぎ』(元禄5年序)に初出の発句である。『きさらぎ』は季題分類によらない俳書のため、そこでの季の扱いは不明だが、古注釈において春の句として解釈されて以来、これまでずっと春の句として受容されてきた。しかしながら、当該句は、嵐雪と親しくした除風が編んだ『青筵』(元禄13年奥)では秋の句とされていることが明らかなため、新たな解釈を試みた。

一般に、個別の全発句集や注釈書が編まれてしまうと、ほとんどの人はそれらを通してのみ作品を鑑賞し、元々の俳書にどのような形で入集していたかは忘れられてしまう。発句の受容において全発句集や注釈がいかに大きな影響をもつかを示す好例として検討した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 服部温子	4. 巻 46
2. 論文標題 嵐雪発句「名月を家隆にゆるす朧かな」考	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 叙説	6. 最初と最後の頁 24-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 服部温子
2. 発表標題 嵐雪発句「名月を家隆にゆるす朧かな」考
3. 学会等名 東海近世文学会12月例会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----